

論文要旨

所属ゼミ	河野研究室	学籍番号	80430443	氏名	小堀 恭志
(論文題名)					
伝統工芸品の永続性に関する調査研究 ・百年超もの永続を可能にした要因を探る・					
(内容の要旨)					
製造業に10数年従事し、他社との差別化を図るため日々コストダウンや短納期生産を実践することを余儀なくされてきた私にとっては、QCDの観点で見たとき、C（コスト）が高く、D（納期）は長いという「伝統工芸品」が、江戸時代から現在まで百年超もの間なぜ永続することが可能だったのであろうか、という素朴な疑問を抱いていたことが今回の研究の出発点である。そして、「伝統工芸品」がなぜこんなにも長く続いてくることが可能だったのかの答えを探り、この答えが、一般論として、果たして現在の企業の永続性に応用できるかを併せて考察することが、本研究の狙いである。 具体的なアプローチとして、先行研究をレビューしたうえで、「江戸切子」「江戸和竿」を「伝統工芸品」の調査対象に選定し、それらに従事する職人へのインタビューを通じて、永続を可能せしめた理由を考察・整理し、自らの仮説を検証した。 「技術や道具に関する『変化』により永続性が否定される」を基本的なフレームワークとして、インタビューから得られた職人の「変化」への対応行動を考察することで、「新しいものへのチャレンジ精神は、世代を問わず盛んである」「『変化』に対応するだけでなく、工夫が随所にみられる」「『変化』に対する行動パターンはそのままの型では継承されず、型を変えて受け継がれることが相対的に多い」といった事実が明らかになり、「伝統工芸品」の永続を支えているのは『変化』にうまく対応してきたこと「独自の工夫をしてきたこと」であることがわかった。また、職人の世代間での「継承」に注目すると、同じ職人でも時間の経過によって技能や考え方が変わり、結果として「変化」への対応行動にも違いが生じてくることがわかった。ともすれば、「伝統工芸品」では、師匠・弟子間の特殊技能の伝承がクローズアップされがちであるが、伝承される対象として、技能だけでなく、精神や心も重要であることも明らかになった。 本研究の結果得られた知見から、現在の企業の永続性に対しても、第一に、変化（環境、道具、材料）に対し、既存のものにこだわり続けるのではなく、物事を柔軟にとらえて対応する姿勢が必要であること、第二に、現在の企業も自らがもつ技能伝承のためには、早急に教育システムを導入し運用することが大事であること、第三に、企業の人材育成には長期的な視点で考えることが非常に大切であり、長期的視野を持った人材育成が必要であること、という示唆が導かれる。					